

「モーセ、エリヤ、そしてイエス」（ルカによる福音書九章二八〜三六節）

## 1 変貌

山の上でイエスが輝きと栄光に包まれる、いわゆる「山上の変貌」が、今日の聖書箇所です。

これはイエスの生涯で、ただ一度の、きわめて特異な出来事です。私どもはどのようを受けとったらよいのでしょうか。いや、そもそも、これはどういうことだったのでしょうか。ここで起こったことを、はじめに、私の言葉で辿り直すことをしておきたいと思います。

最初に確認しておくべきことは、いつのことであつたかということです。今日の箇所のはじめに「この話をしてから八日ほどたったとき」（二八節）とあります。ただこれだけでは具体的に「いつ」のことか分かりません。しかし少なくともこの出来事が、今日の箇所の前段落の内容、ご自身の死と復活についてのイエスの「話」（教え）と関係の深いことが分かります。

さてペトロ、ヨハネ、ヤコブ、三人の弟子をともなつてイエスが山の上で祈っていたときです。イエスの顔の様子が変わり、その衣が真っ白に輝き始めます。見るとイエスが二人の人と語り合っていたというのです。その一人はモーセ、もう一人はエリヤだと彼らは気づきます。

モーセとエリヤ、いうまでもなく旧約の「神の人」と称された偉人です。律法はモーセによつてもたらされたので、モーセという名前は、律法（トラー）の代名詞といつてもよいでしょう。

またエリヤは紀元前九世紀の預言者です。エリヤは預言者の代名詞と言つてよいでしょう。しかも彼は、世の終わりに、神の国の到来に先立つてもう一度現れると民衆に信じられていましたので、歴史の未来を象徴するような人物です、この二人のイスラエルの歴史を代表している人と、われわれの先生イエスが語り合っている。それをペトロら弟子たちは目撃したのです。

モーセ、エリヤ、イエス、三人は何を話していたのでしょうか。それについては「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」（三一節）とあります。中身は、後で取り上げることにします。

さて、この驚くべき光景を目の当たりにしながら、ペトロら弟子たちは「ひどく眠かった」などと、きわめて人間的な反応も記されています。後のことですが、ゲッセマネの祈りの時にも、この同じ三人が眠りこけてしまったと聖書に書いてあるのを思い出します。

それでも彼らは何とか我慢し、目をこらして、栄光に輝くイエスと、同じく栄光に包まれている二人の人を見ています。三人の語り合いは終わったのでしょうか、「二人がイエスを離れようとした」（三三節）とあります。そのとき、三人に見入っていたペトロが、我に返つたように、師であるイエスに、私たちがここにいるのは素晴らしい、仮小屋を三つ建てましょう、一つは先生のため、一つはモーセのため、もう一

つはエリヤのために、と口走ったというのです。ルカは、自分で何を言っているのかペトロにも分からなかったと評しています。すると雲が現れ、彼らを覆ったとあります。そのところは、聖書をもう一度読んでおきます。

ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。すると、「これはわたしの子、選ばれた者、これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。その声が出たとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった（三四～三六節）。

雲の中から聞こえた言葉それはまさに神の言葉として、私どもも聞き逃すことにはできませんが、それは後で取り上げることにして、三六節に、さしあたり注目したいと思います。弟子たちは沈黙を守り、自分たちの見たことを当時だれにも話さなかったというのです。「当時」というのはイエスが生きていたときです。彼らが沈黙を破ったのは、イエスが死んでからです。イエスが死んで甦り、天に昇って行った、その後です。そのときはじめて、ペトロたちは、自分たちのした経験、見たことを語りはじめたのです。

じつさいあのとき、ペトロたちは、何が起こったのか、よく分からなかった。その意味は、後から分かった。そのとき啓示されたことの意味は、あとから、イエスの昇天のあとで分かったのです。

## 2 イエスの十字架の死

ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、この彼らが後から分かって語り出したこと、それが何であつたのか、それをいま、できるかぎり、ここから読み解いて、私どもの信仰の糧としたいと思います。

そのために、最初に取り上げなければならないのは、先ほど残した問題、栄光に包まれたモーセとエリヤ、そしてイエスの三人は、何を語り合っていたのかということです。「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」（三一節）とありましたが、それは何であつたかということです。

「最期」についてとあります。直訳すれば「彼の最期」について、です。つまりイエスの最期。日本語でこの漢字は、死を意味します。私どもの新共同訳聖書の理解ではイエスの死について語り合っていたということになります。

ただここでは、もう少し広い含意をもった言葉が、使われています。「出る」（出エジ一九・一、民数三三・三八他）を意味する言葉です。モーセに率いられてイスラエルの民がエジプトを「出る」、脱出（エクソダス）です。ですから彼の「旅立ち」（岩波）とか、彼の「出発」という訳もあります。その内実が、いずれにせよ自由への解放にあることは、出エジプトに関連することから、明らかです。もちろん死という意味もありますので、「彼の最後」（ルター）とか、あるいは「最後のことについて」（口語、聖書協会共同訳）と訳していいと思いますし、それおそらくが一番いい

かも知れません。

ただその場合でも、このイエスの死、それを、たんなる点としてではなく、いわば線としてとらえることが大切です。死んで終わりということではありません。むしろイエスは死人の中から甦り、天に昇り、やがて、私どもの救いと裁きのためにもう一度来たりたまひ、神の国の栄光をもたらす方です。前回の箇所でも私は、「人の子も、自分のと父と聖なる天使たちとの栄光に輝いてくるときに」（二六節）というイエスの言葉を聞いています。

イエスの十字架の死は、イエスの栄光への入り口です。この栄光に私どももあずかることが許されます（ローマ五・二、八・一八他）。イエスの栄光と輝き、つまり歴史の終わりに起こることが、いまここでのこととして、先取りされて、ペトロたち、弟子たちに目撃されたのです。

それゆえ、やがて来るその栄光と輝きを、いまそこにあるからといって、ペトロが仮小屋をつくって、まるで「時間よ止まれ！」（ゲエテ）とでも言うように取っておこうとしたことは（仮庵祭の伝統があったとしても）、間違った、軽々しい行為であったことは、明らかです（使徒七・四四〜五〇）。むしろ輝きと栄光は、イエスの死によってしか得られないものだからです。

ただ、このイエスの最後、つまりその死が、「エルサレム」で起こることは、じつはここではじめて明らかにされた事実です。ルカ九章には、「イエスは・・・エルサレムに向かう決意を固められた」（五一節）という言葉があつて、イエスの生涯の重要な転換点を告げる箇所だということ、私どもは何回か前の説教ですでに聞いています。しかしエルサレムで起こるといふ新しい事実は、ここで弟子たちに緊張感を生じさせても良いと思うのですが、まだそうした切迫した思いは彼らに生じていないように見えます。

何が起っているか分からないまま弟子たちが垣間見られることを許されたのは十字架の死の、その先にあるイエスの栄光と輝きでした。その光は、十字架の苦難と死に覆われていても、すでにそこに射し込んでいることが彼らに分かったのは、イエスの十字架と甦りの後のことでした。しかしそのとき彼らは、沈黙を破って語りはじめたのです。自分たちに及びもつかなかった、神の救いの業がすでに始まっていた、それを目撃したことをはつきり思い起こしたのです。

### 3 これに聞け

その時までペトロたちは沈黙を守ります。何のことか分からない彼らが、たとえ語っていたとしても何の意味もなかったでしょうけれど。そのことに触れずに彼らはどうのように歩むべきでしょうか。それがいま神によって示されます。今日の箇所の終わり、先ほども読んだ、三四〜三六節を見たいと思います。

ペトロが、仮小屋をつくりたい、一つはイエス様のため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためと言っていると、「雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中におまれていくので、弟子たちは恐れた」とありました。少し細かな話ですが、雲が彼らを覆った、この「彼ら」は、モーセ、エリヤ、イエス、この三人のようにも見えま

すが、そうではありません。そうではなくて弟子たちのことです。彼らが雲の中に包まれていった、雲の中に入っていった（出エジプト二四・一五―一八）。そのために彼らは「恐れた」のです。たんに見えなくなっただけで恐れたわけではありません。雲は、旧約以来、神の臨在のしるしです。神が間近におられることに恐れたのです。そのとき雲の中から声が聞こえます。「これはわたしの子、選ばれた者、これに聞け」と。神の声です。

イエスとはだれなのか。「これはわたしの子、選ばれた者」、このはつきりした神の託宣を弟子たちはここではじめて聞きます。あなたはわたしの子、という声はイエスが洗礼を受けたときもありました（三・二二）。しかしその声を聞いたのはイエスだけでした。あるいはこれまで何度も、悪霊が、神の子としてのイエスの本質を見抜いたことが語られています（八・二八他）。しかし弟子たちが認識していたとはどこにも書いてありません。ここではじめて、イエスとはだれなのか、弟子たちに、はっきり語られます。弟子たちに、イエスとは、神の子であることを、ここでははっきり示されます。

その声が聞こえてきたとき、彼らを覆っていた雲もまたなくなっていました。そしてそこに彼らが見いだしたのは、イエスだけでした。むしろこのイエスはもはや栄光に輝くイエスではありませんでした。日々の宣教活動で、おそらく衣服も汚れていたであろうし、疲れもあったであろう。あの、弟子たちが山の上に一緒に昇ってくる前のイエスにはかならなかつたのです。

天からの声は、「これに聞け」と言っています。これとは、さつき目撃した栄光に輝くイエスではありません。いまここにいるイエスです。弟子たちが、いままでも聞いてきたイエス、この方に、これからも聞き、そして従え、それがペトロをはじめ弟子たちの生き方です。

さて今日の聖書箇所、お気づきのようには、すべては、「見る」ことから始まりました。弟子たちは「見ると」（三〇節）、そこにモーセとエリヤとイエスがいた。彼らはイエスの栄光の現れを確かに見たのです。

しかしいまその見たことが、目の前から消えてしまいました。とはいえ見たことが取り消されるのではありませんし、見なかつたことになるのでもありません。見ることに、いま彼らは頼ることはできないのです。その点で、あの時のペトロらと、私も同じです。イエスの栄光は見えない。再臨の栄光の輝きは見えない。約束の地は見えないのです。そのときには、「顔と顔を合わせて見る」（コリント一、一三・一二）と約束されていますが、いまは鏡におぼろに映つたものしか見えないのです。ここでいま私どもが働かせなければならぬのは、耳です。聞くことです。言葉です。神の語りかけです。イエスは私どもに対する神の言葉です。それを証しする聖書も神の言葉です。教会の言葉も神の言葉です。神は兄弟姉妹の言葉によっても私どもに語りかけてくださいます。

何よりも、栄光に輝くイエスではなく、私どもと同じく重荷を負って歩む人の子イエス、この方に聞き、従う。使徒たちが聞き、そして従ってイエスに、彼らの証し（聖書）を通して聞き従って行きたいと思えます。これが、神によって示された地上における私どもの歩みにほかなりません。

（二〇二一・九・一八）